

保育者の育児意識の変容(1)

—母性愛、愛着形成要因に対する意識を中心に—

諏訪 きぬ (心理・教育学科・保育学)

1. 研究の目的

男女共同参画社会推進施策（家庭生活と職業生活の両立支援）と少子化対策を内包して実施された「エンゼルプラン」、とりわけその具体化としての「緊急保育対策等5か年事業」の展開は、産休あけ乳児保育、育休あけ1歳児保育を中心とする低年齢児保育を拡大することになった。5か年事業では低年齢児保育を45万人から60万人に目標設定していたが、計画最終年である1999年度実績は56.4万人で、達成率は94%であった。2000年度から始まった「新エンゼルプラン」では、2004年度までの低年齢児受け入れ枠の目標値を68万人とし、99年度実績より11万6千人増やす計画が出されている。このような拡大施策と並んで、1998年度から乳児保育の指定保育所方式を改め、その一般化を図った。

こうした低年齢児保育の拡大・推進策の激しい展開の下で、その保育に当たる保育者はどのような意識をもって臨んでいるのだろうか。「3歳までは母の手で」とする「3歳児神話」を内包する「保育者の育児意識」は、どの程度克服されてきているのだろうか。本研究の目的は、1987年に実施した「保育者の育児意識調査」と同じ内容の調査を同一対象園で実施し、「エンゼルプラン」実施以前と以後の「保育者の育児意識」の変容について比較検討することである。

2. 研究の方法

1) 調査の経過

本調査は、文部省科学研究費を受けて、金田利子・柴田幸一・諏訪きぬが1987年11～12月に実施した「新入児の受け入れ（「ならし保育」に関する調査）」（その結果は『母子関係と集団保育』明治図書 1990に所収）の追調査である。今回は保育者の育児意識の変容を追跡することを目的に、共同研究者の了解の下に、明星大学特別研究費助成を受けて、諏訪が単独で調査を実施することになった。

2) 調査の方法

①調査期間：1999年5月

②調査対象：前回の調査では、東京都23特別区、8政令指定都市およびその他の6市の中から、乳児保育実施園を選び出し、設立年代を昭和20年代（それ以前も含む）、30年代、40年代、50年代に区分して、526園を調査対象園とした。今回は前回調査で回答のあった235園を調査対象として、調査用紙を送付した。

③回収数・回収率：147園（62.5%）

保育者数・回収率：426人（各園当て3部の調査用紙を送り、3歳未満児保育担当者からの回答を求めた（前回は607人））。

表 1 調査対象圏・回答数

地 域	回収数	公 立	私 立	不 明
1 札幌市	9	1	5	3
2 深谷市	0	0	0	0
3 東京都23区・八王子市	30	11	7	12
4 横浜・川崎市	7	2	5	0
5 静岡市	14	4	8	2
6 名古屋市	14	3	5	6
7 津市	14	6	2	6
8 京都市	13	0	8	5
9 大阪市	6	0	3	3
10 徳島・鳴門市	17	6	5	6
11 福岡・北九州市	18	1	9	8
12 地域不明	5	0	0	5
計	147(100.0)	34(23.1)	57(38.8)	56(38.1)

3) 質問項目の構成

前回と同様に、保育者の育児意識を1)母性愛について(項目1～4)、2)愛着形成の要因について(項目5～22)、3)愛着の対象について(項目23～31)、4)愛着形成の時期と母子分離による子どもへの影響について(項目32～43)の意識からとらえることにした。それら43項目は、①生得説、②動因低減説、③愛着行動制御説、④コミュニケーション欲求充足説という4つの立場(型分け)を内包する質問項目として作成されている。

前回の共同調査では、それら4つの型分けは①生得説→②動因低減説→③愛着行動制御説→④コミュニケーション欲求充足説へと変化すると仮説に立ち、果たして保育者の育児意識がどのように表れるかに着目した。しかし43項目すべてをすっきり型分けできなかったことから、その検討を他日に期すことにしていた。しかし育児意識の分析を主に分担した柴田幸一(静岡大学のち学習院大学)は、課題を残したまま亡くなってしまった。そのため今回の調査はすべて前回調査と同じものを使用することにしたが、型分けについては、分析に当たって諏訪が再検討を行い、若干の修正を試みた。

3. 研究の結果と考察

調査項目43項目の中で前回と今回の調査で有意差(カイ二乗検定)のあった項目は18項目であった。今回は、紙数の関係上、1)母性愛、2)愛着形成要因にかかわる7項目を中心に、その変化を分析することによって、保育者の育児意識の変容を明らかにしたいと考える。22項目の型分けおよび調査の結果は表2、3に示した通りである。

1) 母性愛についての意識

表2は母性愛に関する4項目の型分けと1987年調査（以下旧と表記する）の評定値を示したものである。母性愛に関する4項目のうち、前回と今回の調査で有意差（5％水準）のあった項目は項目2「母性愛は、子どもが生まれてから育児をしていく中で、次第に育ってくるものである」と項目3「母性愛は、たとえ他人の子どもであっても、その子どもを育てていく中で芽生えてくるものであると思う」の2項目であった。いずれも母性愛を生得的に獲得された本能的なものとみなすのではなく、子どもとふれあう中で育ち行くものとみなす項目である。項目2では、「そう思う」が11.5ポイント、また項目3でも、「そう思う」が10.0ポイント減少していた。

母性愛は、わが子であっても他者の子どもであっても、子どもと共にある中で育つとする意識は8割近くに達している（項目2は前回81.4％、今回76.8％、項目3は前回87.6％、今回87.1％）。しかし、「そう思う」と確信する傾向はやや弱くなっているといえよう。

2) 愛着形成の要因についての意識

表3は愛着形成の要因に関する18項目の型分けと旧調査の評定値を示したものである。愛着形成の要因に関する18項目の中で、有意差のあった項目は、項目5、7、12、13、20の5項目であった。項目5の「子どもの世話を特になしなくても、子どもは血のつながった母親に愛着を示すものであると思う」、項目20「子どもは、生まれたときから生みの母親に愛着を示すようにできていると思う」は①生得説に立つ考え方である。また項目13「子

表2 母性愛に関する意識

評定値：上段旧、下段新

番号	型分け				質問項目	評 定 値					
	①	②	③	④		1	2	3	4	5	NA
1	○				母性愛は女性に生まれつきそなわっている本能であると思う。	61 (10.0)	44 (7.2)	132 (21.7)	160 (26.4)	207 (34.1)	3 (0.5)
						47 (11.0)	33 (7.7)	92 (21.6)	132 (31.0)	121 (28.4)	1 (0.2)
* 2				○	母性愛は、子どもが生まれてから育児をしていく中で、次第に育ってくるものであると思う。	31 (5.1)	22 (3.6)	62 (10.2)	136 (22.4)	352 (58.0)	4 (0.7)
						25 (5.9)	16 (3.8)	53 (12.4)	129 (30.3)	198 (46.5)	5 (1.2)
* 3				○	母性愛は、たとえ他人の子どもであっても、その子どもを育てていく中で芽生えてくるものであると思う。	8 (1.3)	7 (1.2)	59 (9.7)	147 (24.2)	384 (63.3)	2 (0.3)
						8 (1.9)	2 (0.5)	43 (10.1)	144 (33.8)	227 (53.3)	2 (0.5)
4	○				母性愛は、自分の子どもにしか芽生えないものであると思う。	482 (79.4)	70 (11.5)	36 (5.9)	10 (1.6)	6 (1.0)	3 (0.5)
						336 (78.9)	55 (12.9)	29 (6.8)	3 (0.7)	1 (0.2)	2 (0.5)

注1：型分け①は生得説，②は動因低減説，③は愛着行動制御説，④はコミュニケーション欲求充足説を表わす。

注2：数値は人数，（ ）は％を示す。注3：*は有意差項目を示す。

どもにとって、母親が第一に価値があるのは、授乳をしてくれるからだと思う」は②動因低減説に立つ見方であり、項目7「子どもが母親に愛着を形成するのは、多くの時間、子どものそばにいるからだと思う」は③愛着行動制御説、項目12「子どもが母親に愛着を形成するのは、子どもの意志疎通（コミュニケーション）の欲求に答えてあげるからだと思う」は④コミュニケーション欲求充足説的意識を問う項目である。ここでは4つの型分けに添いながら、保育者の愛着形成の要因に関する意識の変容を見ることにする。

① 生得説に立つ考え方の変容

項目5の「子どもの世話を特にしていなくても、子どもは血のつながった母親に愛着を示すものであると思う」は、「そうは思わない」が5.1ポイント、「そうは思わない」「どちらかといえばそうは思わない」を合わせた否定的見解は6.5ポイント減っている。同時に「そう思う」も2.1ポイント下がっているが、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」は2.9ポイント増加しており、若干ではあるが、「血のつながった母親」を子どもの愛着対象とみなす考えが増える傾向を指摘できる。

次ぎに項目20「子どもは、生まれたときから生みの母親に愛着を示すようにできていると思う」でも、「そうは思わない」が8.8ポイント、「そうは思わない」「どちらかといえばそうは思わない」は4.1ポイント減少している。反対に「そう思う」と確信する見方も3.2ポイント減っている。

こうした結果から、若干ではあるが「生みの母親」や「血のつながりのある母親」を愛着の要因とみなす考えが増える傾向にあるといえよう。子どもが生得的に「生みの母親」「血のつながりのある母親」へ愛着をもつとする意識は依然として2割程度存在する。

② 動因低減説に立つ考え方の変容

項目13「子どもにとって、母親が第一に価値があるのは、授乳をしてくれるからだと思う」は、「そう思う」が10.4ポイント下がっており、「そう思わない」も1.6ポイントではあるが増えている。愛着形成の要因として、「授乳」を重要とは見なさない意識が増加する傾向がある。しかし「どちらとも言えない」も6.5ポイント増えている。

③ 愛着行動制御説に立つ考え方の変容

項目7「子どもが母親に愛着を形成するのは、多くの時間、子どものそばにいるからだと思う」は愛着行動制御説に立つ考え方である。「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」は7.4ポイント増えており、「そう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」は7.6ポイント減っているところから、愛着行動制御説的な考えが若干増える傾向にあるといえよう。

④ コミュニケーション欲求充足説に立つ考え方の変容

項目12「子どもが母親に愛着を形成するのは、子どもの意志疎通（コミュニケーション）の欲求に答えてあげるからだと思う」はコミュニケーション欲求充足説に基づく見方である。この項目は、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を合わせると、前回90.1%、今回92.5%と圧倒的に肯定する見方が優勢である。「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」は2.4ポイント増えているが、「そう思う」は6.6ポイント減っており、確信的に支持する傾向はやや弱まっているといえよう。

表3 愛着形成の要因に関する意識

評定値：上段旧，下段新

番号	型分け				質問項目	評 定 値					
	①	②	③	④		1	2	3	4	5	NA
* 5	○				子どもの世話を特にしていなくても、子どもは血のつながった母親に愛着を示すものであると思う。	273 (45.0)	97 (16.0)	116 (19.1)	61 (10.0)	55 (9.1)	5 (0.8)
						170 (39.9)	62 (14.6)	97 (22.8)	64 (15.0)	30 (7.0)	3 (0.7)
6	○				子どもは、食べ物を出してくれる人に、最も愛着を示すものだと思う。	275 (45.3)	102 (16.8)	147 (24.2)	67 (11.0)	13 (2.1)	3 (0.5)
						189 (44.4)	74 (17.4)	103 (24.2)	56 (13.1)	3 (0.7)	1 (0.2)
* 7			○		子どもが母親に愛着を形成するのは、多くの時間、子どものそばに いるからだと思う。	95 (15.7)	89 (14.7)	158 (25.4)	153 (25.2)	110 (18.1)	6 (1.0)
						48 (11.3)	49 (11.5)	113 (26.5)	138 (32.4)	78 (18.3)	0 (0.0)
8			○		子どもが母親に愛着を形成するのは、子どものしぐさや、表情、コトバに、 応答してあげるからだと思う。	6 (1.0)	13 (2.1)	42 (6.9)	185 (30.5)	351 (57.8)	10 (1.6)
						10 (2.3)	3 (0.7)	25 (5.9)	129 (30.3)	258 (60.6)	1 (0.2)
9			○		子どもが母親に愛着を形成する時に重要になるのは、母親が子どもに接する時のやり方（質）である と思う。	20 (3.3)	20 (3.3)	70 (11.5)	146 (24.1)	344 (56.7)	7 (1.2)
						15 (3.5)	11 (2.6)	53 (12.4)	99 (23.2)	245 (57.5)	3 (0.7)
10	●				子どもは、血のつながりがなくても、母性的な人に愛着をもつものである と思う。	7 (1.2)	6 (1.0)	89 (14.7)	216 (35.6)	283 (46.6)	6 (1.0)
						4 (0.9)	5 (1.2)	49 (11.5)	178 (41.8)	189 (44.4)	1 (0.2)
11			○		母親が子どもに接する時間的な量が多くなれば、それだけ早く母親に愛着を持つようになるのだ と思う。	85 (14.0)	84 (13.8)	203 (33.4)	132 (21.7)	90 (14.8)	13 (2.1)
						47 (11.0)	47 (11.0)	157 (36.9)	117 (27.5)	54 (12.7)	4 (0.9)
* 12			○		子どもが母親に愛着を形成するのは、子どもの意志疎通（コミュニケーション）の欲求に答えてあ げるからだと思う。	12 (2.0)	4 (0.7)	37 (6.1)	162 (26.7)	385 (63.4)	7 (1.2)
						2 (0.5)	6 (1.4)	20 (4.7)	152 (35.7)	242 (56.8)	4 (0.9)
* 13	○				子どもにとって、母親が第一に価値があるのは、授乳をしてくれる からだと思う。	76 (12.5)	60 (9.9)	169 (27.8)	155 (25.5)	137 (22.6)	10 (1.6)
						60 (14.1)	44 (10.3)	146 (34.3)	116 (27.2)	52 (12.2)	8 (1.9)
14			○		身体的な世話をしなくても、いつも子どものそばにいれば、その人 に愛着を示すようになると思う。	181 (29.8)	137 (22.6)	193 (31.8)	51 (8.4)	35 (5.8)	10 (1.6)
						132 (31.0)	92 (21.6)	123 (28.9)	55 (12.9)	20 (4.7)	4 (0.9)

15				○	子どもは、自分の相手をしてくれる人に一番の愛着を持つものであると思う。	18 (3.0)	17 (2.8)	97 (16.0)	247 (40.7)	224 (36.9)	4 (0.7)
						13 (3.1)	14 (3.3)	82 (19.2)	187 (43.9)	127 (29.8)	3 (0.7)
16	●				母親から食物（授乳など）が与えられなくても、子どもは母親に愛着を形成するようになるのだと思う。	75 (12.4)	92 (15.2)	252 (41.5)	109 (18.0)	63 (10.4)	16 (2.6)
						56 (13.1)	70 (16.4)	179 (42.0)	84 (19.7)	30 (7.0)	7 (1.6)
17	○				乳児が母親に愛着を形成するようになるのは、授乳の時の心地よい身体的接触（スキンシップ）があるからだと思う。	5 (0.8)	6 (1.0)	40 (6.6)	191 (31.5)	361 (59.5)	4 (0.7)
						2 (0.5)	2 (0.5)	36 (8.5)	158 (37.1)	226 (53.1)	2 (0.5)
18		?	?		子どもが人に愛着を形成するのは、常に特定の人が世話をするからだと思う。	34 (5.6)	32 (5.3)	149 (24.5)	211 (34.8)	168 (27.7)	13 (2.1)
						23 (5.4)	20 (4.7)	96 (22.5)	172 (40.4)	111 (26.1)	4 (0.9)
19	○				子どもが母親に愛着を形成するのは、授乳の結果、乳児の生理的欲求が満たされるからだと思う。	27 (4.4)	43 (7.1)	148 (24.4)	231 (38.1)	143 (23.6)	15 (2.5)
						23 (5.4)	23 (5.4)	101 (23.7)	176 (41.3)	97 (22.8)	6 (1.4)
* 20	○				子どもは、生まれたときから生みの母親に愛着を示すようにできていると思う。	233 (38.4)	78 (12.9)	148 (24.4)	79 (13.0)	64 (10.5)	5 (0.8)
						126 (29.6)	75 (17.6)	121 (28.4)	67 (15.7)	31 (7.3)	6 (1.4)
21		?	?		子どもが母親に愛着を形成するのは、母親が子どもの世話をするからだと思う。	12 (2.0)	15 (2.5)	66 (10.9)	229 (37.7)	275 (45.3)	10 (1.6)
						11 (2.6)	6 (1.4)	54 (12.7)	186 (43.7)	164 (38.5)	5 (1.2)
22				○	子どもは、心の波長やリズムの合う人にみずから愛着をもつものであると思う。	41 (6.8)	20 (3.3)	159 (26.2)	218 (35.9)	161 (26.5)	8 (1.3)
						26 (6.1)	21 (4.9)	121 (28.4)	162 (38.0)	88 (20.7)	8 (1.9)

注1：●は反転項目を表わす。 注2：数値は人数，()は%を示す。 注3：*は有意差項目を示す。

4. 総括—保育者の育児意識の変容をめぐって—

有意差のあった7項目について、新・旧比較データを比較しつつ、保育者の育児意識に関する意識の変容をみてきた。ここでは4つの型分けに触れながら、どのような育児意識の変容が見られたかについて、総括しておくことにする。

1) 母性愛に関する意識の変容について

① 母性愛に関する質問項目4つのうち生得説にかかわる項目1，4はいずれも有意差の

見られなかった項目である。項目1「母性愛は女性に生まれつきそなわっている本能であると思う」は、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた肯定的見解が6割近いのに対して、項目4「母性愛は、自分の子どもにしか芽生えないものであると思う」は「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を合わせた否定的見解が9割を超えている。母性愛は女性にそなわる本能だが、わが子にしか芽生えないものではないという意識が保育者の意識としてすでに定着していることが確かめられた。

そしてすでに分析したように、コミュニケーション欲求充足説にかかわる項目2「母性愛は、子どもが生まれてから育児をしていく中で、次第に育ってくるものであると思う」は8割近く、また項目3「母性愛は、たとえ他人の子どもであっても、その子どもを育てていく中で芽生えてくるものであると思う」は、9割近くの保育者に肯定される意識として定着していた。したがって母性愛に関する保育者意識は、母性愛は女性に生まれつきそなわっている本能とする意識を土台にしつつ、しかしその母性愛は子どもと共にある中で育つものとする意識が主流をなしていることが分かる。

② しかし有意差のある項目2, 3において、いずれも「そう思う」とする確信的回答が1割程度減少するという変容が見い出された。

2) 愛着形成の要因に関する意識の変容

① 愛着形成要因に関する生得的意識を問う項目は2つあったが、用意した項目5, 20共に有意差が認められた。そこでは「生みの母親」や「血のつながりのある母親」を愛着の要因とみなす考えが、若干増える傾向が認められた。そして子どもが生得的に「生みの母親」「血のつながりのある母親」へ愛着をもつとする意識は依然として2割程度存在している。しかし反転項目として用意した項目10「子どもは、血のつながりがなくても、母性的な人に愛着をもつものであると思う」は、肯定的見解が9割近くを占めていた。したがって子どもの愛着形成の要因として「生みの母親」「血のつながりのある母親」を重視する生得的意識は、主流ではないことがわかる。しかし項目5は否定的見解54.5%, 中立的見解22.8%, 肯定的22.0%, 項目20は否定的見解47.2%, 中立的見解28.4%, 肯定的見解23.0%と分立しており、まだまだ保育者間で対立の見られる意識といえよう。

② 愛着形成要因に関する動因低減説的意識を問う項目として、項目6＝食べ物、項目13＝授乳、項目17＝授乳時のスキンシップをおき、反転項目として項目16＝食べ物がなくとも母親、を用意した。その中で有意差があったのは項目13で、授乳を重要視する動因低減説的意識は減少する傾向にあった。また項目6＝食べ物については否定的見解が6割を超えていたが、項目17＝授乳時のスキンシップについては、肯定的見解が9割以上あった。また項目16＝食べ物がなくとも母親では、否定的見解29.5%, 中立的見解42.0%, 肯定的見解26.7%と三分立していた。したがって保育者の愛着形成要因に関する動因低減説的意識としては、授乳時のスキンシップを重要視する意識は強くあるものの、授乳や食べ物そのものを重視する意識は弱まる傾向にあるといえよう。

③ 愛着形成要因に関する愛着行動制御説的意識を問う項目は、項目7＝多くの時間子どものそば、項目11＝接する時間的量、項目14＝世話しなくてもそば、の3項目であった。その中で項目7「子どもが母親に愛着を形成するのは、多くの時間、子どものそばにいるからだと思う」に有意差が見られた。肯定的見解が7.4ポイント増え、否定的見解が7.6ポイント減っているところから、母親が多くの時間子どものそばにいることを愛着形成要因

とみなす保育者の意識は若干増える傾向にあり、その際単に時間的量だけでなく、世話の必要性求める見解が5割を超えている。型分けは特定されていないが、世話する人に関連する項目18＝特定の人による世話、項目21＝母親による子どもの世話には、それぞれ肯定的見解が66.5%、82.2%あり、**そばに長くいて子どもの世話をする人に子どもは愛着を形成するとする保育者の意識**はかなり定着しているとみなすことができる。

④ 愛着形成要因に関するコミュニケーション欲求充足説的意識を問う項目は、項目8＝子どもへの応答、項目9＝接する仕方や質、項目12＝子どもの意志疎通欲求に応える、項目15＝相手をする、項目22＝波長やリズムが合う、の5項目であった。その中で項目12「子どもが母親に愛着を形成するのは、子どもの意志疎通（コミュニケーション）の欲求に答えてあげるからだと思う」というコミュニケーション欲求充足説を代表する項目に有意差が認められた。

保育者の愛着形成要因に関するコミュニケーション欲求充足説的意識は強く、各項目の肯定的見解は項目12 92.5%、項目8 90.9%、項目9 80.7%、項目15 73.3%、項目22が58.7%に上っていた。したがって項目12に見いだされた「そう思う」という確信的な見解が若干弱まる傾向は、圧倒的肯定感の中での変容といえることができる。

以上見てきたように、保育者の育児意識は、全体的にはコミュニケーション欲求充足説的意識を強く持ち、それが保育者としての仕事のバックボーンをなしているが、個々のみるとまだまだ対立的見解を含む意識も数多く存在している。それらが恐らくは保育アイデンティティの形成を妨げ、保育の実際にも大きく投影されるように思われる。今回は保育者の育児意識の変容の実態だけを追うに止まったが、次回は意見が分立する項目を取り出して分析を深めたいと考えている。

（付記）この調査は明星大学特定研究助成を受けて実施されたものである。実際の調査は、今回報告した「保育者の育児意識」だけでなく、1987年に実施した「新入園児の受け入れ（ならし保育）に関する調査」全体を、若干の項目の組み替えを行って実施した。内容は大部にわたるため、今回の報告はその一部であることをお断りしておきたい。順次機会を見て、保育者の育児意識の変容だけでなく、慣らし保育の実際の変容や保育のあり方の変容等についても報告したいと考えている。